「研究発表会　詳細レポート」

もみの木福祉会　木村　和人

「構造化を用いた本人の理解に対する支援」

序論

　当施設では、自閉症スペクトラム障がい（ASD）の方への支援として、構造化を用いた支援方法を継続的に行ってきた。特に視覚化による情報伝達では、混乱の防止、自立した行動の形成、効果的な学習等への効果が顕著にみられている。このことから、構造化を用いることはＡＳＤ以外の「こだわりの強い方」「言葉での意思疎通が困難な方」への支援において有効と考え、一人の対象者に焦点を当て、その効果を検証することを研究目的とした。

本論

対象利用者：N氏　（50歳・男性・知的障がい　療育手帳A・支援区分４）

〇場面の理解と、場面の移行に関して、構造化を用い取り組んだ。

1. 課題分析

行動観察記録を二週間行い、課題となる動作に関してプロセスを分解し、原因の分析を行う。

観察記録から**次の場面への移行に関して、声かけを要する状況が多く存在する**ことが分かった。この状況は、毎日のルーティンワーク（食事・歯磨き・髭剃り・入浴）時でも頻繁にあり、また外出などイレギュラーな予定に関しては、必ず声かけを必要とした。分析の結果、行動の開始と終了の認識、次の場面への移行、場面と内容のリンク、などの理解に課題があると考え構造化計画を行う。

1. アセスメント

構造化計画チームを編成し（課長・主任・担当・男性スタッフ）、「時間」「場面の理解」の認識に対してのアセスメントを行う。

「時間」に関しては、アナログ表記とデジタル表記のアセスメントを実施し、デジタル表記がN氏の理解を得やすいと判明した。

「場面と内容」に関しては、N氏の訴えの多くは現物に対する指差しが多く、例を挙げると、筆記用具の購入などの時は、実際に鉛筆を持ってこられ担当に指差しで伝えられている。このような行動を受け、本人の理解に関しては、実際の場面と内容を視覚的に伝えることが重要であると考えた。

③スケジュールの作成

　アセスメントから、N氏のスケジュールを「デジタル時計表記」「写真＋文字」の形式で作成することとした。

　また就労継続Ｂ型を利用されており、毎日の作業内容が異なる事から、スケジュールを貼り付け式にすることによって、予定変更に対応可能な形態とした。

　所持に関してだが、Ｎ氏は常に筆箱を持ち歩かれており、その中にスケジュールを保管することから、好きな物の中に生活の予定が提示され、スケジュール導入においての「スケジュールへの信頼感」や、「移動先での確認動作」といった課題がクリアされると考えた。

④場面の理解

　スケジュール導入によって、一日の生活の流れの理解と、次の場面へのスムーズな移行に関してはクリアされると考えた一方、実際の行動への配慮が不十分と考え、行動を手助けする視覚化とワークシステムを取り入れた。

　Ｎ氏の課題となった行動は二点あり、「歯磨き」「作業の内容理解」である。

「歯磨き」に関しては、スケジュールによる場面への移行のみでは動作定着が不十分であると考え、生活の導線の見直し、日頃使用されている椅子を洗面台に置くことによる歯磨きの意識付け、鏡に正方形のターゲットテープを貼り焦点を集中させるなどの視覚化による配慮を行った。

「作業の内容理解」に関しては、作業を曜日ごとのボックスに分類することから、取り組むべき作業を明確にし、チェックシートなどから終わりを視覚化するといった、ワークシステムによる理解に対する支援を計画した。

⑤支援内容と情報の共有

　①～④に関しては、構造化計画チームで支援方法の計画を立案し、実際の支援導入前にケース会議を行い、支援内容と対応に関しての周知を行った。

ポイントとして、確認動作の定着（言葉の確認ではなく、スケジュールを確認する動作）を全ての支援員が共有することを徹底した。実際の支援として、本人の行動が停止している状態、または次の行動が何なのかを尋ねに来られた時、第一段階として言語を使用するのではなく、スケジュールの使用を促す指差し支援を行い、第二段階としてそれでも訴えの続く場合は、尋ねられている支援員以外の第三者による本人への声かけ（声かけ内容は「スケジュールを確認しましょう」）によって、言語による確認動作を遮断し、本人のスケジュール使用の学習の促進を目的とし支援を行った。

初めてのスケジュール使用において、スケジュールに対する信頼感が重要であり、使用してみて混乱なく生活が送れるといった学習を繰り返す事こそが、安心感につながると考えた。

結論

スケジュールの導入によって、生活全体の見通しと、一日の流れの理解が生まれ、スムーズな行動移行が可能となった。習慣性のない行動に関しては、視覚的アプローチを行うことで場面と内容の理解が生まれ、動作の定着へと繋がった。この点から本人の理解の形成に対して構造化が有意義な支援方法であると考えられる。

一方で、今回の事例に対する取り組みの中から、構造化を用いた支援を形成する上で「支援者のスキルアップ」といった課題も見えてきた。課題の内容は以下の4点である。

課題①「見通し」による生活の安心感

スケジュール導入による「見通し」の形成が本人の生活の理解へとつながり、自立的且つ、安心した生活を支える土台としての要素となるよう、本人の理解に視点を置き導入を行わなくてはならないと考える。

課題②「アセスメント」ストレングスを活かした活動の形成

　本人の興味関心、得意な事、自身のある事などを取り入れたスケジュールの形成が、やりがいのある生活を支えることから、ストレングスに着目したアセスメントの実施が必要である。

課題③「利用者主体」の充実した生活

　スケジュールが、職員主体の考え方による生活の順序のみを指し示す自助具であってはならない。利用者主体となった生活を支える配慮として構造化があり、利用者の方の自己実現に対して、どのように寄り添えるのか再認識する必要がある。

課題④「チームアプローチ」の重要性

　多様化するニーズに対して、様々な視点からのアセスメントを実施し、より有効な支援を実施する事こそ、支援員に求められている姿であると考える。

最後に、「現場力」とは「チーム力」であり、その育成方法の一つに「グループワーク」があると考える。支援者相互の影響による個人のスキルアップが明日の現場の力となり、障がいのある方へのサービスとして提供される事こそ、今後も取り組むべき課題である。